

# 人をつないで未来をつくる機関誌 「ぶんせき」



中 島 淳 一

時が経つのは早いもので、2010年代としても残すところわずかとなりました。現在、編集に携わっている機関誌「ぶんせき」では、比較的新しい企画であった「リレーエッセイ」が2020年1月をもって13年目に突入します。当初は1年間の時限企画ということでしたが、12年間途切れることなくバトンがつながり、ご執筆いただいた方は140名を超えました。執筆者は、学生の方から大ベテランの先生方まで世代を超え、所属も産官学の垣根を超えて、会員の皆様による有機的なつながりを改めて認識いたしました。「リレーエッセイ」は、気軽に読めるコーナーということで題材は執筆者にお任せしております。バトンがまわってきましたらぜひ執筆にご協力いただきたく、よろしくお願いいたします。

人とのつながりといえば、学生時代に参加した東北・関東両支部主催の「分析化学若手交流会」での交流が、編集委員会での活動などに大変役立っております。このような若手を対象としたイベントは、現在も各支部で続いており、分析化学の将来を担う若手の育成や技術の継承に加え、世代間をつなげる役割も果たしていると思います。実を申しますと、「ぶんせき」誌の編集委員会もまた世代や専門を超えた人のつながりが生まれるよい機会になっています。毎年3月に新旧委員の引き継ぎが行われますが、様々な学術領域や技術分野と関係のある編集委員の専門も多岐にわたるため、初めてお会いする方も大勢いらっしゃいます。会議の前後や懇親会を利用し、自己紹介を兼ねてこれまでの経歴や現在の仕事の話を交わしますが、各分野の最新情報や興味深い裏話を聞けるのは委員の特権と感じています。

ところで、多様な専門家の集まる編集委員会にもかかわらず、新企画として繰り返し候補にあがる共通のテーマがあります。それは分析化学における基礎や基本です。情報が満ち溢れ、高度な技術が瞬く間に一般化、陳腐化する時代だからこそ、多くの委員が基礎や基本の欠落に対して危機感を覚え、次の担い手へつなげることの大切さを実感しているのかもしれない。こうした中、本誌では最先端の分析技術を紹介するとともに、「入門講座」や「ミニファイル」の一部として基礎的な内容を扱っており、誌面を通じて技術の継承に貢献することは機関誌ならではの役割の一つだと考えています。

これからも新しい時代へ人や技術をつなげ、未来をつくる機関誌として有用な情報を届けてまいりますので、未永くご愛読いただければ幸いです。

[Junichi NAKAJIMA, 日産化学株式会社, 「ぶんせき」編集副委員長]